国際農業工学　４月２１日レポート

八田與一の生涯を知って

八田與一は台湾のために尽くした水利事業の第一人者である。１８８６年金沢に生まれた八田は、東京大学土木工科を卒業後２４歳で台湾総督内務局の技手となる。最初は衛生工事に関わっていたが、水利事業部署へと移り烏山頭ダムの計画策定、工事指導などダム建設に全力で取り組んだ。

烏山頭ダムは台南県官田郷にあり、堤高５６ｍ、堤頂長１２７３ｍのロックフィルダムで総工費は５４１３万円。当時はアジア一とまでいわれた規模であり、加えて１万６００キロに及ぶ感慨用水路も建設した。それにより、不毛の地であった嘉南平野が台湾最大の穀倉庫になった。

また、八田は工事の従業員が家族と暮らしながら事業を進められるように、建設現場の近くに従事者のための小さな街を作ることを主張し、実現した。そこには家族で住める施設や商店、娯楽施設や学校まで用意されていた。そのような人間性から現地の人からも愛されていたという。

八田は殉職により生涯を閉じた。１９４２年太平洋戦争に徴兵され、そこで命を落としたのだ。敗戦後台湾からの日本人の撤退が求められると、妻は子息の帰還を確かめたその夜、八田が心血を注いだ烏山頭ダムから後を追って身を投げた。ダムの近くには、地元の人たちによって夫婦の墓が建てられ追悼式も行われたそうだ。

八田與一の生涯を知り、残酷な統治民への仕打ちで知られる戦時中の統治下において、真にそこに住む人たちのために尽くした技術者がいたことに感銘を受けた。そして、農業開発のあるべき姿について考えた。

現在の農業開発に公的な資金を用いて支援という形でするものや、商社などがビジネスという形で行うものがある。当時は戦前であり ODA などは存在しないわけだが、公的な事業という点で前者に近いと思われる。八田は、上に述べたように地元の人たちへの配慮、従業者への配慮を忘れなかった。それゆえに、地元の人々から愛され、従業者にも慕われたのだろう。

農業開発を行うとき、開発地の人々やそこで働く人への思いやりを無くしては持続的に根付く仕組みを作ることはできないのではないだろうか。金のばら撒きでもなく技術の押し付けでもない、今も長く効果を発揮している開発だったからこそ、八田のことを台湾の人々は覚えてくれているのではないだろうか。

もちろん、当時は台湾に日本人が多く植民していたため、その開発は台湾の人々のためだけではなかったであろうが、死後の供養をされるほどに八田夫婦は現地の人々に慕われていたことが彼の農業開発の価値の大きさを示しているように思う。

　つまり、八田の農業開発には日本人にも台湾人にも感謝されるものであったわけである。このような開発の事例は珍しいことのように思う。開発は得てして一方の国の搾取になることや、支援金の無駄遣いになってしまうことがある。自分が今後国際開発を学んでいくなかで、どのようにすれば日本と開発国の両方に利益がある農業開発ができるのかを考えていきたい。

参考 URL

台湾の近代化に尽くした人　http://www.a-eda.net/asia/hatta1.html
（財）日本ダム協会　http://damnet.or.jp/cgi-bin/binranB/WAll.cgi?db3=135